



TITLE:

穴[道]湖[畔]布志名第三[紀]層の「たこぶね」の化石

AUTHOR(S):

そのやま, 生

CITATION:

そのやま, 生. 穴[道]湖[畔]布志名第三[紀]層の「たこぶね」の化石. 地球
1935, 23(1): 35-37

ISSUE DATE:

1935-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184378>

RIGHT:

穴道湖畔^フ布志名^ナ第三紀層中の「たこぶね」化石

そ　　の　　や　　ま　　生

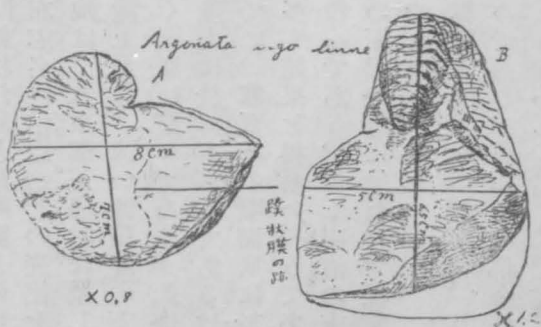
山陰線松江驛と湯町驛との中間穴道湖畔に於て、布志名^ナ焼^ヤ（出雲焼）の産出を以て名ある布志名の地は、八束郡玉湯村に屬し、第三紀層は現在の陸上から、薄い沖積層の下を潜つて、相當に廣く湖底に擴つてゐる。此地一班化石の採集は、陸上に於ても可能であるけれども、筆者の體驗では、寧夏季の頃湖底に於ての手探りが、より多く結果を得易いやうである。表題の化石もその一であり、古く明治の末葉に於て、夏季歸省の際、舟遊に兼ねて、採集を爲した偶然の獲物であつた。

寫真版Aはこれが側面で、Bは正面から撮つたものである。版面上の都合で、前者は少しく實物より縮小し、後者は稍大きくしたのである。

穴道湖畔布志名第三紀層中の「たこぶね」化石

手探りの際何等の感じもなかつたのであるが、現品に就て觀察すると、湖底砂礫の間に於て、僅に露れてゐたものと見え、殻口部左側の一部が、之れが爲め磨蝕を受けて、少しく缺損するは、趣味の多いことである。依て寫真版Bに點線で、之れを補ふべく示したのである。近頃東京高師藤本教授の御來信によると、此地には *Nautiloides* に屬する化石を出すやうだのと、とであつた。本年十月の頃地方の新聞紙上に、在上海自然科學研究所の清水博士が、之れを珍しといはれ、近く英國に携帶せられるとの記事を見たのであるが、恐くは同一種であらうかと察しられる。筆者の仄聞によれば、曾てこの種或は之れと酷似する化石を、アンモナイトと誤

第一圖



であるから、確實なる記載を爲し難いのは遺憾である。依て前記筆者の往年の採集品に就ても此際再検討の必要を感じ、頃日来改めて観察を試みたのであるが、唯一箇の標本であるから断面の製作上支障あり、僅に外部からの観察に止めたのは、已むを得ぬ次第である。

認せられて、明治の初年頃には、この地方を中生層といはれたのであつた。然るにその後之れが誤を知られた結果、第三紀層と改められたといふ。元より過去の傳聞によるの

第二圖



出雲八東郡玉湯村布志名第三紀層中
Argonauta argo L.

この化石の大観は、寫眞版に見える通りであるが、筆者は左記の要點により、Nautiloideaに屬せずして、正に Argonauta argo L. であると確信する。即ち

その一、螺殻は前者のやうに、一平面に捲くことなく、少しく歪んで、動物としての進化した腹

足類の殻と、形態上の類縁を保つことである。

その二、體の大觀は、少しく左右相稱を缺き、左右兩側共に腕の第一對が擴張して、蹼狀の膜を具へたことが明に、殻は之れから分泌せられ痕跡が、螺殼上に曲線によりて、明瞭に現れてゐることである。(聊臆説であるが、該動物の幼時に於けるものゝ化石ではあるまいかと思はれる。)

その三、螺殼上の波狀線が著しく外部に突出

し、外縁には多くの斑點を有することである。

以上の理由により、前記の通り、「たこぶね」(缸魚)の雌であるを堅く信ずる次第である。要するに、最近頃には有名となつた同地産の化石とは、多分似而非物であらうけれども、意義の深く又趣味の多いものであるから、餘白を借りた次第である。(結)

(昭和九、一一、八、稿)

炭礦民俗誌小稿

(二)

山口 彌一郎

目次

- 一、炭礦民俗誌の研究
- 二、石炭に關する初期の文獻
- 三、石炭の發見
- 四、石炭の名稱
- 五、石炭の分布

炭礦民俗誌小稿

- 六、探掘と搬出
- 七、坑内に於ける照明と通風
- 八、石炭の用途

一、炭礦民俗誌の研究

數年來炭礦聚落を地理學的方面より見直さう